

「MJVAXを終えて」座談会

2010年8月28日（日）於：SVP2板橋

参加者：佐藤博昭、中村明子、服部かつゆき、瀧健太郎、田中廣太郎、大江直哉、斉藤理恵、柳田晶子 ＊中沢あき（遠隔参加）

日本・マレーシア映像交流事業のこれまでの経緯

2002年

山形国際ドキュメンタリー映画祭の東京事務局・藤岡朝子さんから佐藤博昭に電話が入る。

「マレーシアの映像作家ナジブ・ラザクが日本で作品制作をするのでお手伝いをしてあげて欲しい」。ナジブは日本に滞在し、ドキュメンタリーを制作。佐藤、服部が撮影や編集の協力を行い、作品は日本工学院専門学校で特別授業として試写された。その後、ナジブはマレーシアに帰国し作品を完成。以後、ナジブが来日した際には再会し、マレーシアと日本の映像作品・作家の交流について企画を温める。

2008年11月

ナジブ・ラザクがマレーシアの現代美術・ビデオアートの開拓者ハスナール・J・サイドンと共に来日。事前に計画していたSVP2の定期上映会「無礼講にする！2008」に、マレーシアのビデオアートプログラム「ガドガド マレーシアのビデオ表現」を加える為に、ハスナールは作品DVDを持参した。この時のミーティングが「日本・マレーシア映像交流」の実現を大きく進めた。

2008年11月28日～30日

「無礼講にする！2008」でマレーシアのビデオ作品を紹介。

2009年3月19日～4月2日

佐藤博昭、服部かつゆき、田中廣太郎、柳田晶子の四名がマレーシアでビデオアート事情を視察。ナジブ・ラザク、ハスナール・サイドンと再会。それぞれの紹介により、20組を超えるアーティスト、グループ、ギャラリー関係者と会い、アーティストによるプレゼンテーションの場を設けると共に、佐藤、服部、田中による作品上映やアーティスト間の交流を行う。

2009年9月12日～10月12日

「日本・マレーシアビデオ交流」を東京、福岡で開催。マレーシアからは、3月の視察で出会った作家の中から、5人（シャロン・チン、カマル・サブラン、コク・シュウワイ、マスヌール・ラムリー・マフード、ヌルハニム・カイルデン）が来日した。東京では板橋熱帯環境植物館、六本木ストライプスペース、福岡ではアジア美術館・あじびホールでのイベントに加え、ワークショップ、レクチャープログラムを行う。

*詳細なレポートはSVP2のHPを参照されたい。<http://svp2.com/>

2010年7月4日

服部、佐藤、柳田が別件で来日していたサイモンと再会。彼は2009年のK.Lでは、バレンタイン・ギャラリーのキュレーターをしていて、我々にマレーシア、フィリピンなどアジアのビデオ作品を見せてくれていた。

2010年7月21日～8月9日

MJVAX: Malaysia Japan Video Art Xchange2010 開催。

日本側の作家として佐藤博昭、中村明子、服部かつゆき、瀧健太郎、中沢あき、田中廣太郎、大江直哉の7名が参加。有志参加として斉藤理恵、柳田晶子、東英児が加わった。

MJVAX : Malaysia Japan Video Art X change 2010 概要

全日程：2010年7月20日～8月9日

参加者

日本側

佐藤博昭、服部かつゆき、田中廣太郎、中沢あき、瀧健太郎、中村明子、大江直哉
自費による有志参加者：斉藤理恵、柳田晶子、東英児（マラッカ）

マレーシア側

シャロン・チン、カマル・サブラン、コク・シュウワイ、マスヌール・ラムリー・マフード、ヌルハニム・カイルデン、ハスヌール・J・サイドン

コーディネイト

モハメッド・ナジブ・ラザク、久貝京子（国際交流基金K.L）

会場

ナショナル・アート・ギャラリー・マレーシア（ギャラリーおよびオーデトリウム）
MMU（マルチメディア大学・クアラルンプール）

UiTM (マレーシア技術大学・ペラク)
USM (マレーシア科学大学・ペナン)
House of MATAHATI (マタハチ・アートスペース・クアラルンプール)
Krash Pad (クラッシュ・パッド・クアラルンプール)

SAMA-SAMA Guesthouse (サマサマ・ゲストハウス・マラッカ)
*SAMA-sama Guesthouse Mini Art Festival が開催され、主催者は別であったがコク・シュウワイが主催者に加わっていた。田中、東、中沢が作品出品とパフォーマンスで参加

助成

ナショナル・アート・ギャラリー・マレーシア、国際交流基金クアラルンプール、MDEC (Multimedia Development Corporation)

協力

MMU (マルチメディア大学・クアラルンプール)、UiTM (マレーシア技術大学・ペラク)、USM (マレーシア科学大学・ペナン)

概要

ナショナル・アート・ギャラリー

日本・マレーシアビデオ作品上映：オーデトリウム 7月20日～8月6日 (休館日を除く 10:00～16:00)

インスタレーションおよび5台のモニターによるループ上映 7月21日～8月6日 (休館日を除く 10:00～18:00)

インスタレーション設置：日本側：瀧、大江、マレーシア側：ハスナール、ヌルハニム、マスヌール

モニター上映作品：日本側：佐藤、服部、田中、中村、中沢、マレーシア側：カマル、ヌルハニム、マスヌール、シャロン、シュウワイ

7月29日 MJVAX : Malaysia Japan Video Art X change 2010 公式レセプション

7月31日 ライブパフォーマンス・イベント 田中、中村、服部がパフォーマンスに参加 観客約150名

レクチャーおよびアーティストプレゼンテーション

MMU (マルチメディア大学・クアラルンプール)

7月23日 参加者：佐藤、服部、中沢 プレゼンテーション：田中、服部 学生約80名

UiTM (マレーシア技術大学・ペラク)

7月24日 参加者：佐藤、服部、中沢、中村、田中 プレゼンテーション：全員 学生約250名 教員・関係者約10名

USM (マレーシア科学大学・ペナン)

7月26日 参加者：佐藤、服部、中沢、中村、田中、大江、斉藤 プレゼンテーション：全員 学生約200名 教員・関係者約15名

マタハチ・アートスペース (12 art space・クアラルンプール)

7月30日 参加者：服部、大江、瀧、斉藤 プレゼンテーション：瀧、大江 マタハチ関係者約10名

ワークショップ

クラッシュ・パッド・クアラルンプール

8月2日 ビデオワークショップ 参加者：全員 子どもたち約30名 関係者10名 * ナショナル・アート・ギャラリーのキュレーター・クーンの提案により実施

その他

新聞取材 7月22日 対応：服部

BFM ラジオインタビュー 7月29日 出演：服部、中沢

SAMA-sama Guesthouse Mini Art Festival 8月6日～8日

参加者：佐藤、服部、田中、中沢、柳田、東

作品上映：東、田中、中沢 パフォーマンス参加：田中

座談会

佐藤：皆さん、今回のマレーシアツアーお疲れ様でした。いろんなことがありましたが、印象的なことから振り返っていきましょう。昨年までの経緯は別紙にまとめますので、今回の一連の出来事に絞りましょう。準備段階からでもいいですが、どうでしょうか？

瀧：僕は、日本でもなかなか一緒に行動できないメンバーで、今回動いたことが面白かったですね。最近日本での展覧会が出来ていないし、こういうビデオアーティストだけのメンバーで何かをやる機会が暫く無かったですよね。

佐藤：僕も結果的に、このメンバーで行けたことは良かったと思いますよ。去年、今回の為のプレゼンテーションで参加してもらった作家の人達がたくさんいました。人選についてはマレーシア側の意見というか、プレゼンに同席したナジブからも返信が来て、最終的に決まったわけです。でも、具体的な行程が出てくると、期日の問題とか、レクチャー対応とか、決まっていない事も含めて実務的な問題も出てきたので、そういうことを分担できて対応できるメンバーだったと思います。

瀧：トラブルに対応できるって重要ですよ。

佐藤：先方に何らかの不手際があったり、急な変更があっても、そこで文句ばかり言ってもしょうがないし、出来るだけ和やかに進めたかったからね。今回もいろいろあったけれども、みんなの対応が柔軟だったことは有難かったですね。

中沢：皆、"大人"のアーティストだなあと感じていました。なんとというかハプニングを楽しめる余裕があるメンバーでしたよね。良く言えば、そこに皆のクリエイティビティも垣間見たりして。

服部：面子が違ったらどうだったかは、試しようがないけど。

瀧：展覧会に関して言えば、今回のようにインスタレーションとシングルチャンネルを、同じ企画の中で見せるというのは、大規模な展覧会を除けば、日本でも希なことだと思います。これから成長していくマレーシアのビデオアートと、僕らのような東京でビデオアートを続けてきた人達が出会ったことも面白かった。

佐藤：僕らは日本代表みたいな意識はなかったでしょう。日本では、たまたま同じ時期に日本のビデオアートに触れて、その後もSVPやVCTでビデオアートの上映活動を続けてきたんだと思う。それは日本のムーブメントを代表しているわけでもなくて、個人的な動機を持ち寄りながら、それがたまたま国際交流に繋がってしまった。「出来ちゃった国際交流」みたいな感じなんですよ。

瀧：それが良かったんだと思いますよ。国際交流の婚活みたいな事をやろうとすると、いろんなバイアスが掛かりますよ。

服部：上映と展示が両方出来たことは良かったと思うけれど、それさえも、「どうしても展覧会実現したい」という目標じゃなかったでしょう。関係が始めにあったから、その延長に展覧会が出来てしまった。

アートとドキュメンタリーとの境界

瀧：僕はそもそもの経緯は知らなかったけれども、始めのきっかけがビデオアートからじゃなくて、山形国際ドキュメンタリー映画祭だったというのも面白いよね。藤岡朝子さんに報告しないといけないですね。*前段のこれまでの経緯参照

佐藤さんの立ち位置も面白いと思うんです。僕と大江くんがマタハチ (12art space) でプレゼンをした時に、ルーペシが話題にしたのが、「ドキュメンタリーなのかアートなのか」ということだったんです。その時に大江くんが質問が集中して、「なぜドキュメンタリーから出発してビデオアートなのか？」という質問だった。僕や大江くんは、松本俊夫さんの作品や本を踏まえていたので、その二つは同じ地平にあるから、自然なスタンスだと思っていたけれども、今回はアートかドキュメンタリーか、という事を改めて言語化したり、意識する機会になった。

服部：佐藤さんもドキュメンタリーがスタートでしょう？ 最初に見せてもらったのがドキュメンタリーだった。

佐藤：舞踏家のドキュメンタリーだね。僕の場合は幸運にも、大学でビデオアートを勉強しながら、一方で同じ研究室に記録映画を研究している先生がいた。だから両方の面白さを若い時に発見することが出来た。

瀧：本来はその境界はないんだけど、世の中ではどこかで二つの間に線を引いてるんですよね。僕の解釈ではコンテンポラリーアートの中でビデオを使った作品と、ビデオアートと、ドキュメンタリーと、実際は三つありそうな気がするんだけど、そのあたりが勝手に線引きされてしまっているんですよね。

佐藤：60年代の日本の映像作家の方が垣根がなかったような気がする。松本俊夫ももちろんそうだし、小川紳介にしても、たまたま出口がドキュメンタリーだったけれども、劇映画も作っているし、カメラマンのたむらまさきさんも、黒木和雄や若い頃の大島渚もそうでしょう。映像の実験性も含めて柔軟に往き来していたんだと思うんですよ。今の方がスタイルに対して見る側が作った壁があると思う。例えば、ビデオアクティビストは問題意識のあるドキュメンタリーだ、みたいな印象が先行してあるでしょう。

今回のマレーシアの作家たちでも、人種とか社会のシステムとか、いろんな問題意識があって、結果的にインスタレーションになった、あるいはシングルチャンネルだった、ということだと思う。日本でも若い作家はそのあたりは抵抗無いんじゃないかな？

中沢：松本さんといえば、映像作家という言葉を使い始めた方ですけど、この肩書きの定義の仕方は日本独自で面白いと思うんです。USMのレクチャーでも触れましたけど、実際の所、今はテクニカルメディアとしてのビデオかフィルムかという分け方も曖昧になって

きていますよね。映画業界でもビデオを使うことが当たり前になってきているわけですし、つまりフィルムメーカー、ビデオアーティストという言葉の意味が曖昧になってきている。そうした中で、我々がやっていることはなんだろう、ということから自ら考察するタイミングに私たちは居るんじゃないかと思うんです。その話にシャロンが反応してくれたのは印象的だったし、思えば瀧さんや服部さん他メンバーも日本語での肩書きは映像作家だったと気がついて。

瀧：作家のスタンスとは別に、受け入れる側が規定していますよね。この人はアーティストじゃなくてアクティビストだ、とか。メディア側もその方が採りあげて紹介しやすいからそうなるんでしょうね。批評家のスタンスも重要で、多面的に見てくれる人が少ない。齋藤さんは今回はどう見てたんですか？

齋藤：現代美術の中にあるいろいろな境界の問題は確かにあると思います。今回のマレーシアでのイベントは、まさにそういう境界が溶解した瞬間のように私には思われました。どうしてそういう事が出来たのかを考えると、お互いに隔たりがないような状態でぶつかり合ったからのかなというのがひとつと、マレーシアと日本の双方で、受け入れる体制がオープンだったからなのかなと思っています。

瀧：それは、参加作家のメインの三人(佐藤・服部・田中)がマレー化していったからじゃないかな？

服部：知らないうちにマレー化していたのかな？

田中：率直な感想を言えば、現地の観客もそうした境界についてはよくわかっていなかったと思いますよ。モニターに映っていればテレビ番組のような感覚だっただろうし。

齋藤：個々のアーティストの共時性はあったと思うんです。スタンスの違いはあるけれど、この時代にビデオ作品を作っているという共通の意識を感じました。

瀧：最近のみんなの作品を見てなかったしね。

服部：明子さんの最新作は現地で完成・発表できて良かったじゃないですか。

中村：その話しはもう少し後で。

オフィシャル・セレモニー

田中：受け入れ態勢としては、オフィシャルなセレモニーが面白かったですね。

瀧：僕もセレモニーは楽しめたな。

中村：私もオフィシャルなセレモニーはビビットに印象に残ってるな。あれがメインだったんじゃないかと思うくらい。公式な行事が大事なんだ、ということが伝わってきた。

佐藤：具体的にはナショナル・アート・ギャラリーのオープニングレセプションですよ。それと、UITEMでのレクチャーの時の歓迎式典ですね。どちらも衝撃的でした。

ナジブの中では、今回のイベントをマレーシアのオフィシャルな形で残そうという思いがあったと思う。僕らの中では、ナショナル・アート・ギャラリーでのイベントは、実現す

れば有難いけど、むしろ街のギャラリーとか、フリースペースで展開できたらいいね、というのがあったんですよ。ナジブはマレーシアの政治的な部分も重視している人なので、ナショナル・アート・ギャラリーで正式な手続きを踏まえて開催した方が、イベントが認められるという意識はあったと思う。

中沢：ずっと、私たちの活動ってアングラなものだと思ってたんですが(笑)、それがマレーシアでこんなにメジャーに紹介されて、そのギャップが面白かったな。

瀧：プレスもたくさん来ていたから、どんな風に紹介されたのか、掲載された媒体を見たいですね。

佐藤：送ってもらえるように頼んだんだけど、まだ来てないよね。ラジオの録音はどのなの？

服部：僕と中沢さんはラジオ番組にも出たんですよ。頑張って宣伝したけど、まだ、送ってこないですね。

中沢：そういえばそうですね。忘れてるな、彼…。

マルチメディア大学

服部：KLからバスで1時間くらい走ったところに、サイバー・ジャヤという、IT企業を固めて誘致した都市があって、シュウワイが勤めているマルチメディア大学もそこにある。そこでのレクチャーはアニメーション志望の学生も多いと聞いていたので、廣太郎がやることになった。

瀧：学生の反応はどうだったの？

田中：アニメーションは手で一枚一枚書いていくという認識があるみたいでしたね。対象がアニメーションを勉強している学生というのは聞いていて、僕は古典的なアニメーション作家の作品も持っていきました。ジョルジュ・シュヴィツゲベルとノーマン・マクラレンの作品です。僕の作品も含めて、ドロ잉とストップモーションという形に分けて紹介しました。最後に紹介したのがブルーというイタリアのグラフィックのチームの作品で、街の壁とか屋根とかに画を描いて、それがコマドリでアニメーションになって動くんですけど、規模がもの凄く大きいんです。そういう作品を見せた後に、シュウワイが言っていたのは、丁度僕の前時間の授業でアニメーションは紙に一枚ずつ描いていくのだ、という古典的な授業があったらしく、コントラストが良かったと言ってくれました。

瀧：多様性が見えたということだよな。

田中：学生も自分でカテゴライズしている感じはしましたね。知らないだけなのか、知らずとしていないのか、判らないですけど。例えばマレーシアの作家でも、ウォン・ホイチョンの『ドッグ・ホール』のように、突然、実写にアニメーションが加わったりする作品もあるでしょう。僕はああいう作品は大好きなんで、見てないのかなと思いましたけど。

服部：でも学生もわりと、しっかりしているところもあるよ。実験的な作品を作っていて、食っていけるのかとか、「見る」ということがどういう事なのか、とか廣太郎が戸惑うような質問が出てきたよね。

田中：僕は自分の作品のコンセプトについては話してなかったんだけど、「視覚」と「見る」事の関係に話が出たので、「何で俺のコンセプトを知っているんだ」ってびっくりしたんですよ。資料が配られてたのかな？

マレーシアのアートシーン

佐藤：大江くんは全体にどういう印象でした。

大江：何しろ現地の皆さんの手厚い歓迎が嬉しかったですね。ペナンに着いた時も、ナショナル・ギャラリーのウエニーが空港に迎えに来てくれたし、いろんな事をケアしてもらったというのが最初の印象です。

佐藤：それは、ナジブがナショナル・ギャラリーを巻き込んで、正式なイベントにしてくれたからかも知れないね。彼の功績ですよ。

大江：ナジブはインスタレーションのセッティングでも、随分手伝ってもらったし、有難かったですね。

中村：最後まで空港まで来てくれて、「いろいろと出来ないことがあって、十分じゃなくてごめんね」って言ってましたよ。

瀧：マレーシアサイドも一枚岩っていうわけではなかったみたいですね。

中村：でも他の作家たちも、今まではお互いあまり知らなかったけど、今回一緒に出来て良かったって言ってたよね。

佐藤：マレーシアサイドの問題もいろいろとあったみたいだけど、今回の一連のイベントで、それまで一緒に行動しなかった作家たちが、チームになっていったというのは、ひとつの成果だと思いますね。僕らが間に入ったことも、きっかけになったみたいですよ。東京でも半ば合宿状態だったし、今回もその時のメンバーがまた中心になってくれたので、マレー系とか中国系とかそういう集まりではなくて、チームになっていった。それは、僕らにとっても面白かったし、彼らもこれまで体験していなかったみたいですね。

大江：作品については、ヌルハニムの作品を始めとして、とても判りやすかったという印象ですね。一番難解だったのがハスナールのインスタレーションでしたが、僕は彼のような分かり難さにもっと触れたいと思いました。ギャラリー巡りをした時も、そこにあった作品は全体に判りやすかったですよね。

中沢：私には、マレーシア側のインスタレーションはある意味明解に響いてきたな。ヌルハニムの作品は、映像の中の女性は何かを訴えているのだけど、声に出して明らかにすることが出来ない／許されない。イスラム社会での女性の立場についての作品なのだと思いますが、じわじわと迫り来るような念力みたなものが在りつつも、とてもエレガントな作

品だと思います。ハスナールの作品は、自分を生み育んだ社会や環境、伝統に敬意を払いつつも、そこにまだ縛られている作家自身の葛藤も感じました。その矛盾の中に生きる難しさやしんどさとかね。でもそれがとてもシンプルかつ美しい形にまとめられていて、とても印象的でした。でも実はあれがハスナールの作品と気がついたのはペナンから帰った後で…。もっと作品について訊ければよかったなあと反省。

中村：伝統的な絵画みたいなものはないのかな？

瀧：伝統工芸みたいなものとか、そういうカテゴリーをアート作品として展示してるところはあった。現代美術の中では既存の作家のコピーのような作品も含めて、いろんなものが混じっている感じがしたな。東京の状況の方が、そういったジャンルが分断され過ぎてるのかな？

佐藤：僕らもペナンで、若い作家の作品を見たけれども、そこでも混在していたよね。水墨画で描いていたり、極端に抽象的だったり、グラフィティみたいな感じだったり、いろんなものの影響がダイレクトに現れている印象は受けたね。美術学校の卒業制作展みたいな感じで、若い表現をみんな集めたような展覧会だった。

中村：USMのミュージアムも凄い幅ですよ。私はグッと来たな。宇宙部屋も好きだったし。科学とアートを両方扱いたってハスナールも言ってたし、手作り感も凄くいいんだよ。原人の骨から宇宙船まで全部ある。

服部：去年改装中だったところも完成していて、スケールが大きくなってたね。

佐藤：USMのミュージアムは、時々メールで案内が来るけれども、子ども向けプログラムにも力を入れてるみたいで、そのコンセプトはとても面白いと思うな。大学に子供たちが来てミュージアム・ツアーをやっている。

服部：今回も僕らが行った時に、学生たちのグループが寝転がって作業していたでしょう。学校の授業として作業をしているんだけど、あれが印象的だったな。展示してあるもの見るだけじゃなくて、作業スペースになっている。

佐藤：大きな紙に、学生たちがそれぞれの過去から未来までを描いていた。

瀧：地域のコミュニティの中心みたいになっているんでしょうね。

服部：ハスナールのリーダーシップなんですよ。若い人達がとてもよく動いている。

佐藤：ハスナールとスタッフの間に、親分と子分みたいないい関係があったよね。レクチャー会場でも、スタッフが200脚くらいの椅子を綺麗に並べていたのに、ハスナールのひと言で全部外しちゃった。椅子に座らせると学生の集中力が持たないって言うんだよ。

服部：準備のため会場に入って、始めは僕らの座る位置をどうするのかって話していたんだよ。いかにも大学のレクチャー会場のかたい雰囲気だったから。それで、ハスナールに学生の席は普段はどうなの？と聞いたら、彼が「椅子に座ると学生が20分ももたない」って言い出して。それで食事をしている間に、椅子が無くなった。スタッフには申し訳なかったけど、その動きは素早かった。

マレーシアという国と制度

佐藤：中村さんは全体にどういう印象だった？

中村：私はマレーシアについての予備知識がないまま行ってしまったので、もう少しインドネシアに近い状況なのかと思ってたんですよ（言葉も似てるし）。でも実際は、まあ当然なんですけどかなり独特で、色々驚きがありました。まず何だろう、全然ミックスされてないというか、中国系、マレー系をはじめとして、それぞれがそれぞれの場所に生きているという感じがすごくあった。だから思いっきり多言語社会で、それが本当に面白かったんだけど、シュウワイもシャロンも4～5カ国語しゃべれるし、一般的にもみんな3カ国語くらいは話せるらしい。だからマレーシア人同士でも、英語で話す相手、北京語、マレー語で話す相手と、相手によって言葉を選ぶ。それって日本の状況と対極的だと思ったんだけど、逆に、日本語でも相手によって一人称二人称を変えたり敬語使ったりするからちょっと近い気もしたりして。シュウワイと話していて、「ひとつの言語で考えなくなるから、別の言語で答えを出そうとしたりする。だから、ひとつの言語を極めることが出来ない。」って言ってたのが印象的だったんだけど、実は日本語についても考えさせられる話だなあって思いましたね。

中沢：うん、それぞれの人種が分かれている社会を見て複雑に思った。多民族国家だけど、混ざってないんだよね。共存といえばそうだけど、ちゃんと分かれ住んでいるというか。言語のことは私も面白いと思ったなあ。一体彼らの頭の中ではどの言語でどう思考が進むのかなって。シャロンに訊いたら、私も不思議だわって笑ってたけど。でもその状況は、今母国語を日常的に喋らない環境に暮らす私にとってはある意味大きなヒントをくれたかも。自分の状況を割り切れるようになる自信を貰えた。

佐藤：国の制度とそこに住んでいる人の関係というのは、僕も考えたな。日本でも、明治政府になると、宗教からの生活指導まで、それまでの生活習慣を大きく変えるような制度が出来たでしょう？ でも実際は、ローカルなエリアまでは浸透しきれなかった。自分たちのルールで勝手に生きてた人達がいたんですよ。今回も取り壊される刑務所を見に行っただしょう。あの近くの市場が凄かった。マレーシアは国の宗教はイスラム教だけれども、市場では勢いのある中国系の人達が、豚もアヒルも魚も、もの凄い状況で混ざり合ってる。そばで肉を捌いたりしている。

それぞれの人種の生活エリアには、仏教やヒンドゥーの大きな寺院もあるし、キリスト教の教会もある。その混在が面白い。

瀧：歴史的には人種間の大きな争いもあったでしょう。そういうことが今は表面化しないように検閲もあるんですよ。具体的にどういう検閲があるのかは判らないけど、人種の問題とか、売春みたいな社会問題とか、表に出ないようにしてるんでしょうね。たぶん問題をオープンにしまうと、かつてのような争いが起こりかねない、っていう危惧があるんでしょうね。

服部：シャロンのお父さんは、「ワン・マレーシア」を力説していて、マスヌールに向かって「個人としてのおまえはリスペクトする。でもアーティストはタブーをもっちゃいけない、アーティストが変えなきゃダメなんだ」って言っていた。シャロンが慌ててマスヌールを擁護していたよね。

佐藤：シャロンのお父さんは、一代でレストランを築いてきて、現実の問題として抱えてきたんだろうね。俺たちの問題は国の問題にはならない。中国人の問題にされてしまう。中国人の社会で解決してくれ、っていう風潮が今でもあるんでしょうね。

共同作業の可能性

中村：私がいなかったマラッカはどうだった？

田中：僕はパフォーマンスで体を動かしましたよ。新しく作った「ザビエライザー」というアプリケーションを駆使して。

服部：パフォーマンスの前日に、佐藤さんと三人で会議をして「K.Lでやったパフォーマンスのままじゃダメだろう。明日は何か新しいことやらなきゃ」って言って、じゃあ、新しい映像のアプリケーションを考えようと言うことになってね。

中村：なんで「ザビエライザー」？

田中：マラッカにいたからです。

服部：安直だよ。ザビエル教会があったというだけのひらめき。

佐藤：去年の東京のイベントを含めて、一番彼らと共同作業をしたのは廣太郎だよ。

田中：東京の時は「ちゃんとやろう」という意識は強かったですよ。事前にテーマも話し合っていたし、アウトラインが出来ていて、実際に会って作業を進めた。それぞれのコンセプトに沿って用意してきた素材もあったし、受け入れやすかったですね。今回がちゃんとしていなかったわけではないけど、「一緒にやろう」ということは決まっていたけど、即興の要素が強かったですね。パフォーマンスでも、何も決まっていなかったですね。

中村：イラストレーターをリアルタイムで使ったことも？

田中：彼らに伝えていたわけではなくて、僕の中では決めていました。マレーシアでは今までにやったことのないことをやろうと。僕にとっては、二通りのパフォーマンスが出来たことが良かったですね。

中村：ナジブがカメラを準備してくれたのに使わなかったよね。

田中：二つ目で使いましたよ。でも、カマルとの話し合いは移動のバスの中でしたからね。彼らもあそこのホールでの演奏は初めてだったみたいで、その場でリハーサルをしながら、僕も考えていたんですよ。でも、それは返ってやり易かったかな。

中村：イラストレーターを使った映像は、私は面白かったけど、お客さんはその場で作図していることが判ったのかな？

田中：判ってたんじゃないですか。

佐藤：ダンスとの関係はなかなか難しいよね。

中村：ダンスと映像と音楽と声で、あれだけ要素が多いと難しいですよ。

田中：まとまらない状態で要素だけが配置されていると、難しいですね。

佐藤：それぞれのアーティストは、何かが出来るとはけれども、即興とは言っても、「何に反応するのか？」というアウトラインは必要なんだよね。だからカマルのパフォーマンスは、中心がカマルの音楽だから、みんなが反応できてまとまりが見えたんだと思う。

中村：廣太郎君がダンスを撮らないって決めたのも面白かった。

田中：始めは映像の素材にしようというアイデアだったんですけどね。リハーサルの時に決めました。

佐藤：インプロビゼーションはお互いを過信するとうまくいかない気がする。誰かが何かを与えてくれるだろうとか、自分はこれを与えているとか、そういうバランス関係がずれると、うまくいかないでしょうね。ある筋道は必要なんだと思うな。

瀧：ダンサーは特に難しいと思いますよ。ミュージシャンの場合はステージ上の他の状況を見て聞くことができるけど、ダンサーはステージに上がると視点が動くので、どうしても自分の筋道に頼って、いつのも手癖が出やすくなるような気がします。

中村：もしくはダンサーを中心にするかですよ。

服部：カマルのパフォーマンスの終わりごろ、客席の後ろで踊る人が突然現れて、その人の動きが唐突で面白かったな。暫く見ていて、この人はこういう役割の人なんだと判ったけど、始めは驚いた。カマルのステージはそういう仕組みがはっきりとしていたよね。

田中：仕組みがきちんとあるから、ある人は舞台からもはずれることが出来る。

佐藤：僕は、即興というのは「破れ目」みたいなものだと思うんですよ。形はあるんだけど、破れそうなところが幾つかあって、それを誰かが破ってもいいし、いつ破ってもいいんだと思うんですよ。そうになると、誰かが走り出してもいい。

瀧：それは、カマルのパフォーマンスは音楽が中心となっていたから、その考え方が出来るんですよ。

中沢：なるほどねえ。私自身はあまりインプロ向きの人間じゃないんだけど、今興味があって、だから今回皆のパフォーマンスはすごく参考になったんですよ。学ばせていただきました！

服部：インプロビゼーションの話をしていたら、今回のツアー自体がインプロだった気がしてきたな。

中村：きれいなまとめ！

佐藤：それでは服部くんにきれいなまとめを。

服部：僕は今回ゆったりとやらせてもらいましたね。過去を振り返ると、自分がやりすぎて首が廻らなくなったりしたんだけど、今回はマレーシア側も日本のメンバーもそれぞれがいろいろとやってくれたし、それで良かったのかなと思う。

瀧：展示や上映に関しては、もう少しこちら側で要求しても良かったんじゃないかな。DVDの再生がうまくできてなかったとか、上映の日程が決まっていなかったとか、今後の関係を考える上でも、厳しく伝えてもいい部分だと思う。

佐藤：ナショナル・アート・ギャラリーはMJVAXを誰に見せようとしているのか？ という方針が見えなかったよね。観客というよりも関係者の為に行っているような印象を受けた。だから公式なオープニングがうまくいけばOK！っていう感じがしましたね。僕が悔やまれるのは、上映プログラムの延長で、プログラムの最後に誰かが話しをするような、企画をすれば良かったな。そうすれば上映プログラムにもギャラリー側の力の配分が出来たんじゃないかな。

服部：K.L.に到着したらすぐ、今回の全ての担当のスタッフと、ミーティングをしたり食事をしたりという時間を作れば良かったかも知れませんね。全体を判ってもらった関係にならなかった。

佐藤：「みんなでやるぞ」っていう雰囲気を作れば良かったですね。このイベントの全体像がいったい何なのか、ギャラリーのスタッフに浸透していなかったんだろうね。

服部：現場の人達にも、今回のイベントの意義がきちんと伝える場を作れば良かったんですね。

佐藤：いろいろなことがありましたけれども、忙しいところでそれぞれの力を出してくれたマレーシア側の作家たち、イベントやレクチャーをコーディネートしてくれたナジブ、ハスナール、それからほとんど全行程で面倒を見てくれた国際交流基金の久貝京子さんには感謝ですね。

終わり